パリから

娘とわたしの時間

増井和子

パリから

娘とわたしの時間

増井和子

© Kazuko Masui 1981, Printed in Japan

パリから　娘とわたしの時間
昭和56年2月20日印刷
昭和56年2月25日発行
著　者　増井和子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71
電話・業務部(03)二六六一五一一一
・編集部(03)二六六一五四一一
振替　東京四-八〇八
印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　大口製本株式会社
定価　九〇〇円
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

パリから　娘とわたしの時間・目次

I 黄色いランドセル……7
黄色いランドセル　犬　ピアノ　雄鶏の赤ぶどう酒煮　ちひろの図書館　あの日、七つの子　学校、その一ヵ月　給食　教室で　校長先生　チェスをしながら　リセ

II 「ああ　日本語」……53
リセの子　国語の時間　1　国語の時間　2　「ああ　日本語」　マ・パ　ドラッグ　クラスメート　フランス式バカンス　落第　成績　ルジェ先生　黒い髪

III 十三歳の部屋……93
十三歳の部屋　1　十三歳の部屋　2　足　シネクラブ　とび級　パーティ　シビル　蝶ネクタイ　シルビイのお母さん　リセの小娘たち　中三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

の英語の教科書　獣の季節

Ⅳ　フランス式進学……133

アルコール　ショパン　ビイ・エフ　フランス式進学　1　フランス式進学　2　フランス式進学　3　フランス式進学　4　学校でしているはなし　1　学校でしているはなし　2　日本対フランス　フランシスのサンルイ島　十五歳

Ⅴ　旅立ち……173

女の先生　カミカゼ　キャシイからの手紙　日本の道パリの道　1　日本の道パリの道　2　日本の道パリの道　3　日本の道パリの道　4　日本の道パリの道　5　日本の道パリの道　6　日本の道パリの道　7　行くときまって　旅立ち

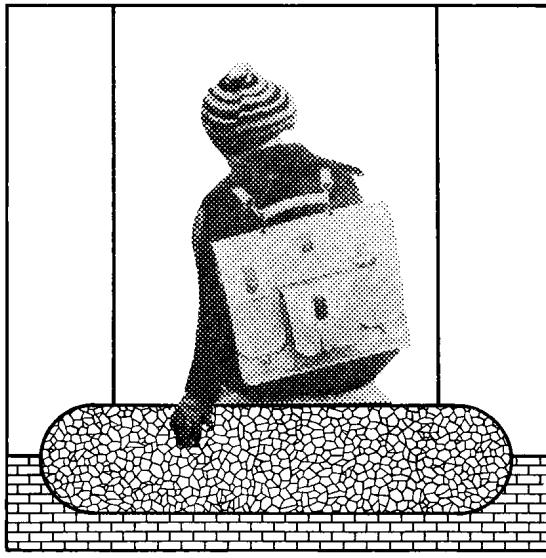
あとがき……212

装幀・イラスト　仲條正義

パリから　娘とわたしの時間

I

黄色いランドセル



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

黄色いランドセル

ベルが鳴る。
ドアをあける。
「お帰りなさい」
黄色いランドセルのずり落ちそうな子が立っている。羊の皮の、白いコートの袖が、また破けている。頬っぺたがリンゴのように光ってる。
「男の子みたいでしょ、暑いィ暑いィ」「真冬なのよ、どうしたの」「ナタリイと競走してきた、背中みて！」「あらッ」後身頃が真中で裂けて袖が半分ちぎれてる。「どうしてこんなひどいことになったの」「キャトリーヌとフレデリックが両方からひっぱった。鬼ごっこだモン」
「もう少し静かにかえってちょうだい」「だって、急ぐの、おしっこなの」「学校をでるときすませてらっしゃい」「だって学校のトイレ臭いんだもの」「だって」が多すぎます」
「ママ、ボタンができた」
神妙な日だった。うしろで、ランドセルをおろしてる。
「ボタンがとれたの？」

「ううん、ここにボタンがはいってるの、ほら、さわってみて、ね、ボタンみたいでしょ、かたいの」

セーターをあげて胸を張ってみせる。みた目にはなんの変化もないけれど、右側が、たしかに、くりっと固い。

「ブーツぬいで横になってごらんなさい。きたない手でさわらなかった？　痛くない？　熱はなさそうね。なんでもないと思うけど、様子みましょう」

五月の朝だった。ボタンときいた日から四ヵ月ほどたっていた。「こっちもできた」と報告があった。忘れていたわけではなかった。やっぱり、そうだったか、始まってしまったのか……。母親は天井をにらみつけた。何故か取返しのつかないような気持になっている。それでも、六月七月八月と、夏の三ヵ月は穏かにすぎた。ほんとうに動きだしたのは、九月も半ばをすぎて、新学期がはじまっていた。

「伸びをすると痛いの」「ぱかっと割れて穴があくような気がするの」「周りはふわっとふくらんでるのに、真中のつぶは生れたときのままでしょ、ほら、さわって」毎日、生なましい報告がつづく。まるで火山が噴きあげてくる。自分には記憶がない。

「マリアンヌ、おっぱいかくし、してるのよ！」鞄をおろすいとまもなく目が輝く。

「今日、大変だったの。身体検査だったでしょ、そうそう、ちひろは、高さが百四十センチ、重さが三十二キロ、belle fille（ベル フィーユ）だって」

十歳から十一歳へ、一年で九センチ伸びている。この勢いだとあと二年で母親の背丈をぬ

く。

「マリアンヌね、知ってるでしょ、五十二キロの子、今度測ったら五十八キロになってたの。マリアンヌが呼ばれて秤りの部屋へいったの。そしたら、みんな、しーんとなったの。それまで先生が、静かにしなさいって何度いっても、わいわい、がやがやってたの。それが、針が落ちてもきこえるくらい、息もとまるくらい、みんな、こんなになってマリアンヌをみたの。マリアンヌ、真赤になってね、測る先生が〈五十八〉っていったら、みんな、わーっと笑ったの」

「そんなとき笑っちゃ悪いでしょ」

「フランスの子は遠慮なしよ。マリアンヌも真赤になって笑ってたよ。いまね、みんな、おっぱいできの時間でしょ。ロゴンスはもうママくらいね、どうしてだろう、粒はママみたいじゃないよ、こんなにちいちゃいよ、ぽちょっとして可愛いの。エリザベットはまだぜーんぜん。イルスはね、着てるとなんにもないかとおもったら、ちひろと同じふわできなの」

「あの男の子みたいな可愛い子は？」

「ああ、ピケティ、まだまだ、ペタンよ。ちひろも、このあいだまでああだった、じいっと長いことカチンカチンだった、もう戻らないよね。ねえママ、男の子ってつまらないでしょうね、こんなエキサイトメントがないじゃない？」

「どうかしらね」

犬

犬がほしい、という。
犬が飼いたい、という。
どうして家では犬が飼えないのかと迫る。
「ママが出かけて居なくても犬が迎えてくれれば淋しくない」と痛いところをついてくる。子どもの気持はわからぬでもない、が、「旅が多いから生きものは飼えない」という家庭の事情が優先する。「それなら犬のホテルに預ってもらえばいい」その通り、しかし、一泊四十フランでは、ママのお財布が泣いてしまう。
「自転車もきた。ピアノもきた。テレビはまあいい。ちひろの夢はみんなくる。でも犬だけはダメなんだね……」
灯りを消したベッドの中で、目ばかり大きく見開いた子どもは眠れずにいる。

自分にも犬の記憶はある。
——なんの病気で、どんなふうに死んだのか、穴を掘って埋めてくれたのは、父か母かねえやか。行儀よく足をかさね、黒い土の穴に横たわった、しんと動かない犬の姿が浮かんでくる。

土をかぶせると、用の終った大人はスコップをさげて行ってしまい、子供が二人残った。砂場から白い砂を運んできては、まだ湿った黒い土の上にかけた。……暗くなっていた。「ごはんですよ」ねえやの呼ぶ声がする。「どんなに遠くへ引越してもメリイのお墓にだけは来る、ね」相手にも約束させた、相手は男の子だったか女の子だったか——。

娘は犬のいる町で大きくなってきた。

窓をあければ犬がいる。

散歩にでれば犬にあう。

つい立止るほどの美しいコリイが老いた貴族のような姿でゆく。

出遇った犬と犬がお喋りをはじめたために未知だった飼主同士もお話しをする。だからッ、友だちほしけりゃ犬つれて歩くんだナ。失礼にも友人は犬の効用をこう説いた。

肉屋の門口の犬繋ぎにつながれて主人を待つ犬と、買い物の母親を待つ幼児が遊んでる。歩道には遠慮もない犬の糞が点々と置かれたまま、学校がえりの子が右足でふんづけて、気がついて慌ててもどってる。「どうして?」「左足でふむと幸運なの、知らないの」

はじめて犬つきのタクシイに乗ったときは驚いた。「ボンソワール・ムッシュ」「ボンソワール・マダム」運転手がうしろをむいて挨拶したのと、助手席の犬がむっくと体をおこしたのと同時だった。

「どこまでいきますか」犬も鼻をあげ目をしばしばっとした。「オペラ座まで」「承知しました」カレも目で同じように応えた。運転手がハンドルをにぎった。カレも前へ向きなおり坐りなおし前方をみた。二つの背中が並んで走る。「ママ、おじさんの色と犬の色とよく似合

ってるね」

彼はオリーブグリーンのとっくり、助手君は薄茶のもかもか、二人は暖かそうで、お客は口笛の一つも吹きたくなるではないか。

犬には墓地もある。パリ郊外、セーヌの小島のラヴァジャル島、河を見おろす木立ちに囲まれた墓地、入口には立派な鉄の門があり、墓守りの家があり、花々に彩られた墓石が並び、金の文字が刻まれている。

「さよ(アデユー)うなら・わたしの(モン)・ズズー

一九五四年〜一九六八年

お前は　いつも　私の心の中に　いる」

「偉大なる映画スター　リン・チン・チン」

「わが忠実なる伴侶　マイク」

裏切ることのなかった伴侶の生前の姿を、陶器に焼きつけてとどめる墓もある。

むろん、無料(ただ)で死ぬ犬もいる。集団で焼かれるパリ市の市葬、交番へ電話をかければ、お巡りさんがくる。——ヴァカンスのパリは捨て犬の町になる。

「ママ、名前ももうきまってるの、知ってる？　ダゴベールっていうの。エニッド・ブライトンのミステリーからとったの。感じあるでしょ。学校からかえってドアをあけるとダゴベールがとびついてくるの、顔中なめるのよ、ダゴ、ダゴって抱いてやる、ちひろは犬に好かれるの、ナタリイのとこのサムだって大変なのよ、道であってもみんな臭(にお)いにくるよ、臭う

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook